

芝居見たまま 妹背山婦女庭訓（山之段）

——中座三月狂言——

寺林吉太郎

〈出典：「演芸画報」、大正12年4月〉

西ひがし、いづれ劣らぬ花と花、時候も丁度よしの川、と角は語っている。時候によってめずらしく出された妹背山三段目の奥は東西の両名優によって演じられている。

其処は中央に大きな川、兩岸には桜が今を盛りと咲ききそうている。そうして上手にはややささやかなる大判事清澄の別館、そうして下手には後室定高の家の座敷が其川につき出したように建てられている。床はいつもと違って東京式に高い処に設けられてある、それがさも重々しい句調で語って行く。

〴〵古への、神代の昔山城の、国は都の始にて、妹背の始め山々の、中を流るる吉野川、塵も芥も花の山、実に世に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨所。

と、上手の床が語った。下手の方はそれを受ついで、

〴〵妹山は太宰の小貳国人の領地にて、川へ見越の下館。

上手へとった。

〴〵背山の方は大判事清澄の領内、子息清船^{いつぞや}日外より、此処に勘気の山住居、伴ふ物は巢立鳥、^{こだま}箆と我と只二つ、経誦む鳥の音も澄みて、心細くもあはれなり。

又下手が語った。

〴〵頃は弥生の初めつかた、こなたの亭には雛鳥の、気を慰めの雛祭り、桃の節句の備へ物、萩のこは飯腰元の、小菊桔梗が配膳の、腰もすうわり春風に、柳の揚枝はし近く。

と、これにて下手の障子はあけられた。雛は立派に飾られている。そうして腰元の小菊や桔梗、まだ其外にも居る。娘雛鳥（雀右衛門）は燃え立つような赤地の襦にはし近く座をしめている。それはただもう背山の久我之助の方ばかり見て……。

腰元共ははしたなかった。

『なう小菊、いつものお雛様は御殿でお祭りなさるれど、姫様のおしつらひで、この山峰の仮座敷、谷川を見晴らし桜の見飽き、お雛様もひとしほお気が晴れてよからうの』

腰元は雛から桜、桜から男の噂に移った。

そうして、雛などはああして常住二人居ても、

〴〵肝心の寝る時は、離れ離れの箱の中、思ひの絶える間はあるまい。

自分たちに比して仇口々にいうのであった。雛鳥はそれがヒシと胸にあたるのであった。こうして妹山へ来ていて、日毎久我之助を山のあなた、川の向うに見る事は出来ても、やはり雛と同じ境界であると思った。しかも、太宰家と大判事の家とは互いに不和の中であった。雛鳥はこう言うた。

『恋し床しい清船様、此山のあなたにと聞いたを便り、母様へお願ひ申してこの仮屋、お顔見たさの出養生、此処迄は来れども』

〱山と山とが領分の、境の川に隔てられ、物いひかはす事さへも。

『ならぬ我身の儘ならぬ』

〱今は中々思ひの種、いつそ隔てて恋わぶる、逢はれぬ昔がましぞかし。

雛鳥はかき口説いて泣いた。腰元共も皆同情した。

『お道理で御座ります、ほんにひよんな事で隣同士の紀伊の国、大和、御領分のせり合ひで、お二人の親御様はすれずれ、雛鳥様と久我様の、妹背の中を引き分くる妹山背山、船も筏も御法度で、たつたこの川一つ、ツイ渡られさうなもの』

一同は川をのぞいた。中にも、こう言うものもあった。

『なう小菊、瀬踏して見やらぬか』

小菊はとんきょうな声を出した。

『めつさうな、此谷川の逆落し、紀州浦へ、一つてきに流れて往つたら、鮫の餌食、したかもうし雛鳥様、お前の病気をお案じなされ、此仮屋へ出養生、それもよそながら久我様に、お前を逢はず後室様の粹なおさばき、ツイ夫婦にして下さりませと、ぢきにお願ひ遊ばしたら、よもやいやとは』

〱岩橋の、渡る事こそあらずとも。

『せめて遠目にお姿を』

腰元は口々にこう言うて、雛鳥の手をとるもの、障子をひらくもの、皆よって久我之助を見せようとした。

〱久我之助はうつうつと、父の行末身の上を、守らせ給へと心中に、念彼観音の経机、案に入つたる顔かたち。

と、上手の障子はひいてとられた。内に久我之助清船（鴈治郎）前髪の若々しい姿、経巻をひろげて経机の前にもたれて一生懸命に誦んでいた。それを見つけた腰元共の騒ぎはなかった。

『アレアレ机にもたれて久我様の、物思はしいお顔持』

『お癪がなおこりつらん、エエお傍へ行きたい、コレ此処にいるわいの』

『もし久我之助様』

と、口々に呼んだ。

〱言へど招けど谷川の、漲る音にまぎれてや、聞こえぬつらさ。

『エエ辛気、こちらが思ふやうにもない、コレ』

〱こちらむいて見たがよいと、あせるお傍に気につきづき。

と腰元ははらはらとしていた。そうして手を挙げて招くもの、声を立てるもの、いろいろとして見たが、それは一切画餅であった。お傍の女は考えた、ほんにそれよと膝をうった。

〱口で言はれぬ心のたけ、かねて認め奥山の、鹿の巻筆封じ文、恋し小石にくくり添へ、女の念の通ぜよと、祈願をこめて打つ磔。

小菊は雛鳥から受取った文を小石にくくりつけて、ちょっと神様を念じて、ポンポンと拍手をうって、それを川へ投げた。しかしそれもやっぱり向う岸へはつかなかった。小菊はフ

ウフウと口でふいていた。

久我之助川に目をつけ。

清船はきつと川を見た。

『何処よりかは水中に、打たる石は重けれど、逆巻水の勢に、沈みもやらず流るるは、重き君も入鹿と云ふ逆臣の、水の勢には敵対がたき時世のならひ、それと知つて暫しの中、敵に従がふ父大判事殿の心、アア善か』

久我之助は流れを見て悲痛にいうた。床はそれを受けて、

悪かを三つ柏、水に沈めば願ひかなはず、浮む時は願成就、吉野をかりの御祓川、大神宮へ朝拝せんと、柏の若葉摘取つて。

久我之助は静かに庭へ下りた。手には盆とはさみをもっている。そうして柏の若葉をパチリパチリと摘取つた。

それを見た妹山の方は又ひとしきり騒動であった。

『もうしもうし今の小石が届いたか、久我様が川へ下りなされる』

『あの岩角のをり曲りが、川はばがいつち狭い、幸ひのよい逢瀬』

女中達は雛鳥の手をとった。今更ながら恥かしかつたが、扱逢う事が雛鳥にしてはやはり嬉しかった。久我之助の方は一枚一枚柏の葉を水に流して、運命を占うていた。

裾もほらほら坂道を、折から風に散る花の、桜が中の立姿、しどけ難所のいとひなく。

雛鳥はちらちらと散る桜の中へ立った。どれが花やら見わけられぬ程に……。

『なう久我様か、なつかしや』

声をかけた。久我之助もフト対岸を見た。

『オオ雛鳥無事で』

と思わず手をあげた。雛鳥も亦行こうとして、其処は川である事も忘れた。腰元は驚いて肩を貸した。

顔と顔、見合はすばかり、遠間の、心ばかりが抱き合ひ、詮方涙先きだてり。

と床の両方は思い思いに語つた。そうして二人は川と言うままならぬ自然を呪うた。

『もうし清船様、わしやお前に逢ひたさに、病氣と言ひ立て爰迄は来てみれど、親の赦さぬ中頃を、忍んで通ふ事かなはず。』

女雛男雛も年に一度は七夕の、逢瀬は有るにこのやうに。

『お顔見ながら添ふ事の』

ならぬは何の報いぞや……。

雛鳥は川越にさめざめと身の不幸をくどいた。清船も道理とは思ひながらも口にはそれを制した。

『我も心は飛立てど、この川の法度厳しきは、親々の不和ばかりでない、今入鹿世を取つて、君臣上下心々、隣国近辺といへども親み有らば、徒党の企あらんかと、互ひに通路をいましめて、船を留めたる此川は』

領分を分くる関所も同然。

『命だに有るならば、又逢ふ事も有るべきぞ、今流したる水の柏、波にもまれて浮みしは、心の願かなふしらせ、入鹿が掟厳しければ、我も世上を憚りて、此山奥の隠住』

〴〵心の儘に鶯の、声は聞けども籠鳥の、雲井を慕ふ身の上を。

『思ひやれよ雛鳥』

〴〵と儘ならぬ世を恨み泣き。

『又逢ふ事も有らうとは、別る時の捨言葉』

〴〵たとひ未来のたと様に、御勘当受る共。

『わしやお前の女房ぢや』

〴〵とてもかなはぬ浮世なら、法度を破つて此川の、早瀬の波もいとふまじ。

『わしや其処へ行きまする』

と、あわや雛鳥は川へ身をなげ入れようとした。こし元はあわててとめた。川を隔てて久我之助も手をあげてそれを制しとめた。折から大判事清澄様御入りと告げた。久我之助は驚いて向うを見た。そうしてポンと袴のすそをはたいて、庵のうちへ、ちょっと雛鳥を見たがすぐに其儘這入って、バツタリと障子を立切った。雛鳥は本意なく思うた時、後室様御入りと同じように告げた。腰元共は雛鳥を急がして同じく座敷へ去った。これも亦障子をしめきられた。

〴〵花を歩めど武士の、心の嶮岨刀して、削るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中をさく、川辺づたひに大判事清澄。

と東の歩みより大判事清澄（多見蔵）上下、腰に桜の枝をさし挟み、腕組して物思いらしい顔つき。細い道を出て来た。

〴〵こなたの岸より太宰の後室、定高にそれと道分の、石と意地とを向ひ合ふ。

と花道からは襦姿の定高（梅幸）侍に桜の花をもたせて出る。そうして対岸の大判事を見て、

『大判事様、お役目ご苦勞に存じます』

と声をかけた。すでに庵へ入ろうとした大判事はこの声にあとへ戻った。そうして定高に對して立った。

『オオ早かりし定高殿、御前を下るも一時、参る処も一つなれど、この背山は身が領分、妹山は其許の御支配、川向ひの喧嘩とやら、睨合うて日を送るこの年月、心解けるか、解けぬかは、今日の役目の落去次第、狼狽へた捌きめさるるな』

〴〵臉くしやつく茨道、わきへかはして。

定高は大判事のいかつい言葉に對して優しかった。

『仰の通り入鹿様の御上意は、お互に子供の身の上、受合うては帰りながら、身腹は分けても心は別々、もしアツと申さぬその時は、マアお前はどうぞと思召す』

『知れた事』

大判事は事もなげに言うた。

『御前で承はつた通り首打放す分の事さ、不所存な倅は有て益なく又無うてからが事欠け

ず、身の中の腐は殺^{そい}ですつるが後の養生、畢竟親の子のと名をつけるは人間の私、天地から見る時は、同じ世界にわいた蟲、別に不便とは存じ申さぬ』

大判事は丸で自分の子供を蟲のように言放った。定高はそれにかぶせて、
『ハテきつい思し切り、私は又いかう料簡が違ひまする、女子の未練な心からは、我子が可愛て可愛うてなりませぬ、其かはりお前の御子息の事は真実何とも存じませぬ、只大切なはこの娘、忝けない入鹿様のお声のかかつた身の幸、たとひどう申さう共、母がすすめて入内させ、お后様と多くの人に、敬ひかしづかさうと思へば、このやうな嬉しい事は御座りませぬ、ホホホホホ』

心にもない空笑いをして見せた。大判事はいよいよむつかしい顔附である。

『ムム、シテ又得心せぬ時は？』

『そりやもう是非に及ばぬ事、枝ぶり悪い桜木は、切て継木を致さねば、太宰の家が立ちませぬ』

きっぱりと言った。大判事はさもあろうという風に見えた。

『オオさうなくてはかなはぬ処、此方の倅連も得心すれば身の出世、栄花を咲すこの一枝』

大判事は腰から桜の枝をぬきとった。

『川へ流すが知らせの返答、盛りながらに流るるは吉左右、花を散らして枝斗り流るるならば、倅が絶命と思はれよ』

一枝を見せた。定高も亦侍から一枝をとった。

『此方も此一枝、娘の命活花を、ちらさぬやうに致しませう』

『オオサ今一時が互ひの瀬ごし、この国境は』

〱生死の境。

と大きく手をひろげた。

『返答の善悪によつて、遺恨に遺恨を重さぬるか』

『サア是迄の意趣を流して、中よしの川と落合ふか』

女はいよいよ優しくかった。

『まづ夫迄は双方の領分』

『おさばきまつてをりまする』

と定高はハッキリと川向こうへ言うた。大判事は打ちうなずいて庵の方へ。

〱言葉^{そぼだ}時つ親と親、山と大和路分かれても、かはらぬ紀の路恩愛の、胸は霞に埋もれし、庵の内へ別れ入る。

双方ともに這入ったが、やがて定高は障子を開いた。

『娘々』

〱覚束なくも呼子鳥。

雛鳥はソッと出た。

〱音なふ初音雛鳥も、母の機嫌を差足に、

『母様』

とピッタリと手をつかえた。

『けふはお目出度う存じます』

定高は表に機嫌らしい顔をして見せた。

『オオよう飾りが出来ました、母も祝うて献上の此花、備へてたも』

腰元に渡した。腰元はとって雛の前へ。

『いくつに成つても雛祭は嬉しいもの、女子共、何なりと娘が気に合ふ遊びをして、随分と慰めてくれ』

後室の機嫌に腰元共は非常によい訴訟時だと思った。夫は久我様の事を言えと雛鳥に勤めた。しかし娘気にさすがそうとは言い出す事が出来なかった。定高はなおも語をついだ。

『イヤな雛鳥、背丈延びた娘を親の傍に引付けて置くは結句病の種、それで急に思案を極め、そなたによい殿御を持たす、嫁入さすが嬉しいか』

『エエ』

雛鳥はあんまり意外の言葉に駭いた。腰元共も一同に眼を見合し、そうして耳をそばだてた。

『ハテ気づかひしやんな、可愛娘の一生をまかす夫、そなたの気に入らぬ男を、何の母が持たさうぞ、ナア腰元共』

定高は心得顔に言うた。腰元共はもうすっかり其気になってしまった。

『左様でござります、御気の通つた後室様、嫁入の先は大方今のな、ソレこがるる君でござりませう』

一同は当推をして、得手勝手な喜び顔を見せた。定高は一しお声をはりあげた。

『そなたの夫と言ふは誰有らう、入鹿大臣様ぢやわいなう』

そう判然と言った。雛鳥は丸で自分の耳を疑うように驚いた。

『エツ、そんならわたしを嫁入さすとは……』

『オオ太宰の少貳が娘雛鳥、美人の聞え叡聞に達し、入内させよと有難い御諚』

『エツ』

雛鳥はもう言葉さえつかえた。定高はなおも声を励まして、

『日本国に此上のない嫁入の随一、果報な娘、此様な目出度い事があるものか、ナア女子共』
と言う言葉の内にも、何処やらに涙が見えた。腰元共は互いに顔を見合わせた。

『お目出たいと申さうか、いつそ乱騒ぎで御座ります』

「工合違ひの嫁入に、菊も桔梗も投げ首の、皆々小腹立つて行く。

と腰元共はあたふたと次の間へ行って仕舞った。のこったのは定高と雛鳥の二人である。定高は桜の枝を娘の前にさしつけた。

『親の赦さぬ云ひかはし、いたづらは叱つて返らず、一旦思ひ初めた男、いつ迄も立通すが女の操、破りやとは云はぬが、貞女の立様が有りさうな物、とつくりとよう思案しや、此花は八重一重、互ひに不和なる親々の、心揃はぬ二つの花、一つ枝に取り結び、切放すにはなされぬ悪縁の仇花、今そなたの心次第で、当時入鹿大臣の、深山嵐に吹散され、久我之助は

腹切ねばならぬぞや、雛鳥と縁を切つて入鹿様へ降参すれば清船も命を助かる、しらせは川へ流す桜』

母は娘にすべてを明した。そうして、

『貞女の立様、サアサアサア見たい見たい』

膝をすりよせた。雛鳥はもう絶体絶命である。

『母様』

「だんだん聞分けました。

と母の前にピタリッと両手をついた。

『オオ』

母も亦娘の心は察した。

『そんなら得心してたもるか』

『アイ』雛鳥は熱鉄を呑む思いであった。

『オオ出かしやつた出かしやつた、それなれば髪もあらためすべらかし、祝うて母が結びなほしてやりませう』

と口では言うていたが心の内はもう雛鳥の覚悟もしっていた。そうして障子はさされた。上手の障子が開いた。

「重き背山の庵の内、父が前に謹んで。

久我之助は大判事の前に両手を突ている。

『久我之助の心底聞こし召しわけられ、切腹御赦免下さる事、身に取つていか許りか』

「大慶至極と手をつけば、黙然たる大判事、やや打うるむ眼を見開らき。

大判事の半眼にひらいた其処には、露が宿っていた。

『今朝入鹿大臣この大判事を召出し、先帝寵愛の采女、身を投げたりとは偽り、其方が伴久我之助、人知らぬ方へ落しやりしに極まれば、必定、汝等が方にかくまひ有るべしとの難題、よくよく思へば采女の御難をさけん為、入水の体にもてなして、密に落し参らせしは、中々久我之助が智慧でない、鎌足公の指図を受けてのはからひと、識つたは身もけふがはじめて、若輩者には神妙の仕方、ハハア』

「出かしたりと思ふにつけ。

『邪智深き入鹿、久我之助が降参せば命を助けん連れ来れと、情の言葉は釣寄せて、拷問にかけん謀事、責殺さるる苦しみより、切腹さすれば采女の詮議の根を断つ大功、天下の主の御為には、ナアニ伴の一人など^{むぐら}葎に生る草一本、ひきぬくよりも瑣細な事と、涙一滴こぼさぬは武士の表、子の可愛ない者が九生有る者にあらうか、あまり健気な子に恥て、親が介錯いたしてくれる、侍の綺麗を飾り、いかめしく横たへしこの大小、伴が頸切る刀とは』

「五十年来知らざりしと、老の涙に清船も。

大判事は自分の大小をとつてハッタと疊に打つけた。久我之助も父を見上げた。

『命二つ有るならば、君には死して忠義を立て、父には生きて養育の、御恩を送り申さんに、今生の残念』

「コレ一つと、顔を見上げ見下ろして、ワツとひれ伏す親子の誠。

大判事と久我之助とは、手に手をとって泣いた。

「こなたの亭には母後室。

と、こっちの障子が開くと、雛鳥の髪は下げてある。そうしてそのうしろに櫛をもって立っている母親は、

『サアサア目出たい、そなたの名の雛鳥を其儘の内裏雛、装束のつけやうも此女雛と見合せて』

母は女雛をとって雛鳥の前へさしつけた。

雛鳥はその女雛を恨らめし気に見た。

『女夫一対いつ迄も、添遂げるこそ雛の徳、思ふお人に引離され』

「何楽しみのお女御后、茨の絹の十二一重、雛の姿もうらめしと。

雛鳥はガワラリッと雛を打つけた。女雛の首はあわれコロリッと落ちた。母親の胸にはそれがヒッシと響いた。娘の手を持そえて、

『娘、入内さすと言うたは偽り、まつこの如く頸切つて、渡すのぢやわいなう』

『えッ、そんならほんに貞女を立てさせて下さりますか、アア忝けない有難い』

「と、伏し拝む手を取って。

母親はこのいたいけな言葉が悲しかった。

『入内せずに死ぬるのを、夫程に嬉しがる娘の心しらいでならうか、そなたが自害しやつたら、久我之助も俱に自害召されうもしれぬ、せめて一人は助けたさ、一旦得心したにして、母が手づからといた髪は、下髪ぢやない、成敗のかき上髪、介錯の支度ぢやわいの』

「高いも卑いも姫御前の、夫と云ふはたつた一人。

『久我之助の宿の妻と思うて死にや』

『アイ』と雛鳥は嬉しそうであった。

『エエ是程に思ふ中、一日半時添はしもせず』

「賽の河原へやるかいのと、引き寄せ引き寄せ雛鳥も、膝に取付き抱きつき、忝けなさ
と嬉しさと、逢て別る名残の涙、一つに落つる三つ瀬川。

親子は正体なく泣きくずおれた。川を隔てて久我之助も、もう死出の用意の白装束になっている。そうして九寸五分は静かに取上げられた。グッと突立てて左の脇腹、大判事はあわてて止めた。

『ヤレ暫其刀引まはすな、覚悟の切腹せく事はない、冥途の血脉誦みさしの無量品、親が読誦する間、一生の名残り女が面、一目見てはナアゼ死なぬ』

と高らかに叫んだ。

清船は苦し気な顔をあげた。

『存じもよらず、此期に及んで左程狼狽へた未練な性根はござりませぬ』

久我之助は自分の死んだ事が雛鳥にしれたら、これも亦死ぬるであろう。切腹をかくしてくれいと願った。父はうなずいた。

『出かしたよく気がついた、年頃立ぬく武士の意地、不和な中ほど義理ふかし、命を捨るは天下の為、助くるは又家の為、気づかひせずと最後を清う、花は三よしの侍の、手本にせよ』

と立派には言うがほうり落つる涙はとどめ得られぬ。しかし、桜の花は其儘に川へ流された。それと見た雛鳥は嬉し気に、

『アレアレ花が流るるは、嬉しや久我様のお身に恙のないしるし、私は冥途へさんじます』

「千年も万年も、御無事で長生遊ばして、未来で添うて下さんせ。

雛鳥は心で暇乞をした。そうして、

『かか様切つて切つて』

身をつきつけた。母はもう涙で何にも見えわかぬ。これも同じく桜を川へボンと投げた。久我之助もそれを見た。

『オオ嬉しや是ぞ雛鳥が入内のしらせ、久我之助が心の安堵、采女の方の御ありかは、最前申し上ぐる通り、此世に心のこりなし、御苦労ながら御介錯』

背山の方では倅が父にせまった。

『サアサアかか様切つていの』

妹山の方では娘が母にせまった。

両の床は、

「命もちりぢり。

「日もちりぢり。

と別けて語った。

定高はもう覚悟した。そうしてその声は判然としていた。

『ハテさうちや、早西へ入る日輪は、娘がお迎へ、弥陀の来迎、西方浄土へ導き給へ、南無阿弥陀仏』

と目を閉じて、思い切って頸をうった。

『ハツ』

と大判事の胸にこたえた。とたんに障子はガラガラとあけられた。それによって久我之助の姿も見えた。定高も亦、障子をあけた。二人はもう物が言えぬ。互いに仕方で、久我之助の切腹、雛鳥の頸をうった事は告げられた。

「ハテしなしたりとどうと坐し、悔むも泣くも一時に、^{あき}憫れて言葉もなかりしが。

と双方一緒にどうとなった。

定高は氣をとりなおした。

『入鹿大臣に差上げる雛鳥の首、御検使お受け取り下され』

と呼ばわった。大判事も亦威儀をつくろうた。

「しづしづおり立つ川辺の柳腰、娘の頸をかき抱き。

定高は首を抱えて、のりになった。

『大判事様、わけては何にも申しませぬ、御子息のお命は、どうぞと思うた甲斐もない、あへない有様、お前様のお心も推量致して居りまする』

大判事はうなずいた。定高はなおも語をついだ。

『せめて久我之助様の息ある中に、此頸を其方へお渡し申すが娘を嫁入りさす心』

定高の言葉は哀れであった。

『嫁は大和、賀は紀伊国、妹背の山の中に落つる、吉野の川の水盃』

　　〱桜のはやしの大島台。

『目出度う祝言させ申さう』

『そんならこれまでの心もとけて』

『ハテ互ひにあひやけ同士』

定高は嬉しなきに泣いた。そうしていつ迄も甘やかした雛の道具は嫁入道具とてうちへ渡そうと腰元をよんだ。腰元の驚くのをしずめて一々道具は下手の上から、上へ流された。大判事は一々に受取った。

　　〱未来へ送る嫁入道具、行器、長持、犬張子、小袖箆笥の幾棹も、命ながらへ居るならば、一世一度の送り物、五町七丁つづく程、美々敷せんと楽しみに、思うた事に引きかへて、水に成つたる水葬礼、大名の子の嫁入に、乗物さへも中々に、形身も仇の爪琴に、頸取のする弘誓の船、あなたの岸より、彼岸に、流るる血潮清船が、今際の顔ばせ見る親の、口に祝言心の称名。

頸は爪琴にのせられて大判事の方へ。大判事は手裏剣をうって首を受取った。

『千秋万歳の手箱の玉』

とうたうた。頸は久我之助の前へ。そうして父は水盃をさした。

『是迄不和な大判事を、あいやけと思召せばこそ、倅に立てて一人の娘を、オオよくこそお手にかけられし、過分に存ずる定高殿』

大判事はもう倅の為に気も弱っている。

『アア勿体ない其お礼はあつちこつち、不束な娘故、大事のお子を御切腹、器量筋目もすぐれた殿御、夫にもつた果報者、とはいひながらあれ程迄に、手しほにかけて育てた子を、又手にかけて切る心』

双方ともに、子供をさき立てた悔みであった。

　　〱涙はらうて大判事。

と大判事はきつと心をとりのおした。

『倅清船承はれ』

久我之助の前に大音声をあげた。

『人間最期の一念によつて、輪廻の生をひくとかや、忠義に死する、汝が魂魄、君父の影身に付添うて、朝敵退治の勝軍を草葉のかげより見物せよ、今雛鳥とあらためて、親が許して尽未来』

　　〱五百生迄かはらぬ夫婦。

『夫婦忠臣貞女のみさを立て、死したるものと高声に、閻魔の廳を名乗つて通れ』

〰南無成仏得脱と、唱ふる声の聞えてや、物言はねども合す手を、合せかねたる此世の別れ、早日もくれて人顔も、見えず庵の霧がくれ。

『ボーン』

本釣は凄くひびいた。

〰うづむ娘の亡骸は、こなたの山にとどまれど、首は背山に検使の役目。大判事も定高も下に下り立った。

〰涙の川瀬三吉野の、花を見捨てて。と、桜は入相の鐘につれて散った。そうして静かに静かに、幕は閉じられた。